

受賞者氏名	赤松 佳珠子	
所属	デザイン工学部建築学科	
受賞年月日	①2023 年 4 月 19 日 ②2023 年 5 月 19 日	
国内・国外	国内	
授与機関等名称	①一般社団法人日本建築学会 ②一般社団法人東京都建築士事務所協会	
受賞名	①2023 年日本建築学会作品選奨 ②第 49 回東京建築賞一般部門・I 類優秀賞	
受賞(研究)内容詳細	【共愛学園前橋国際大学 5 号館】 ①2023 年日本建築学会作品選奨 ■賞概要 日本建築学会作品選奨は、その年の作品選集に掲載された作品であって、学術・技術・芸術の総合的視点からみて、特に優れたものを対象とする。作品選集の刊行は、1989 年に始まり、日本における建築作品の発表の場として、国内外より高い評価を受けており、本会の最も重要な事業のひとつとなっております。作品選集掲載作品のうちから特に優れた作品を「作品選奨」として選考し表彰します。 ■審査委員より講評 (別紙添付あり) 【ROPPONGI TERRACE】 ②第 49 回東京建築賞一般部門・I 類優秀賞 ■賞概要 「東京建築賞」は、一般社団法人東京都建築士事務所協会が主催する建築コンクールです。1974 年の第 1 回開催以来、東京都内の建築士事務所が手がけた建築作品を公募し、優れた作品の表彰を行っています。新人建築士からベテランまで、住宅、商業施設、公共施設などの作品が出品されます。 ■審査講評 (別紙添付あり)	

共愛学園前橋国際大学 5 号館 KYOAI GLOCAL GATEWAY

人、地域、キャンパス、世界をつなぐ地（知）の拠点

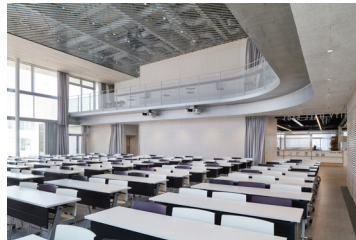
共愛学園は、134年の歴史を誇る子ども園から大学までの総合学園で、その一翼を担う共愛学園前橋国際大学はGLOCALな人材育成と地学一体の取り組みで注目される。「学習の場」「集い・交流の場」「事務機能」を一体化した新たな施設が求められ、地域との結節点となり人々をつなぐ裏表のない建築が必要だと考えた。四隅には特徴的な「4つの顔」が浮かぶ。キャンパスの顔となる「キャンパスゲート」は高く伸びる屋根と木仕上げの軒が来校者を迎え入れる。「アクティビティテラス」は自由に過ごせる広場とホールをつなぎイベント利用が可能である。「サクラエントランス」は活動をアピールする場であり4号館との接続動線でもある。「グリーンテラス」はワークプレイスと道路の緩衝緑地であり吹き抜けのFWAは職員同士の連携を誘発する。活動を支える「プロジェクトルーム」は建具を開ければFLAと一体となり家具以上建築未満のエレメントを「ミドルスケール」と捉え空間の穏やかな関係とアクティビティを生む設えとした。

DATA

所在地：群馬県前橋市 / 主要用途：大学 / 建築主：学校法人共愛学園 ■設計・監理 建築：Cat / 構造：小西泰孝構造設計 / 設備：設備計画 ■施工 建築：塚本建設 / 空調・衛生：針谷工事 / 電気：ソウワ・ディライト ■規模・構造 敷地面積：39,679.53㎡（キャンパス全体） / 建築面積：1,377.60㎡ / 延床面積：1,921.99㎡ / 階数：地上2階建て / 構造：鉄骨造 ■竣工：2021年1月 ■写真：楠瀬友将 + 阿野太一



2階 理事長室前からFLAを見る



コミュニティホール内観。



外観：西側。キャンパスゲートに向かって屋根がせり上がり、来校者を迎え入れる。



キャンパスゲート内観：天井高7.8～8.4mの吹き抜け空間が広がる。

ROPPONGI TERRACE



西側夕景：小さな住宅が連続する西側に対して、東側はスケールの大きなビルが並ぶ。



3B室：玄関（西側）からテラス（東側）に斜めスラブがかかり、床はスキップ状の構成。

小さな風景と大きな風景を接続する斜めスラブ

敷地は、六本木の中心地にありながら小さな住宅や集合住宅が肩を寄せ合うように立ち並ぶ一角。旗竿敷地の奥に立ち、東側が公園に面する。公園側は視界の向こうに大きなビルが立ち並ぶ大きな風景。反対側は敷地ギリギリまで小さな建物が隣接する、下町のような小さな風景。都心に空いたvoid（公園）の開放感を取り入れ、2つの風景を接続し、視線、風や光が通り抜けるテラスのような建築を目指した。公園と敷地の高低差により、地上レベルでは日照や風通しは期待できず、密集するこの環境に埋没してしまう。そこで、大きな風景へと向かってスラブを傾け、2つの風景を接続し、各界の空間が断面的に広がるように光や風が室内に取り込まれ通り抜けていく。新型コロナの影響によりワークスタイルとライフスタイルがより曖昧に重なりあう新しい都市居住のあり方に応答し、自由なアクティビティがこれからの街の風景を彩ることを期待したい。

DATA

所在地：東京都港区 / 主要用途：事務所 / 建築主：シマダアセットパートナーズ ■設計・監理 建築：Cat / 構造：江尻建築構造設計事務所 / 設備：yamada machinery office ■施工 建築：中川企画建設 / 空調・衛生：中央工業 / 電気：力興業 ■規模・構造 敷地面積：270.77㎡ / 建築面積：162.27㎡ / 延床面積：431.78㎡ / 階数：地上3階建て / 構造：壁式鉄筋コンクリート造 ■竣工：2020年8月 ■写真：中村絵



東側・公園より見る。



2B：各住戸のレベル差はそれぞれ異なる。

共愛学園前橋国際大学 5 号館 KYOAI GLOBAL GATEWAY

正会員 赤 松 佳珠子 殿

正会員 大 村 真 也 殿

正会員 小 西 泰 孝 殿

創立 133 年となる共愛学園は、こども園から大学までを有し、この地域のシンボルであると同時に、まちに緑のネットワークを提供している。本計画の敷地は、このネットワーク上に位置し、かつ大学キャンパスのまち寄りにあるため、大学とまちや学園とをつなぐ重要な場所であると言える。一方で、キャンパス内のメイン動線となるモールや、学生も利用する駐車場、および広場に隣接するため、さまざまな要素との関係が求められる裏の作りにくい敷地である。計画は、大学事務室を中心とした建物のプロポーザルから始まり、キャンパス内の諸教室の利用状況の詳細な調査分析やワークショップを経て、そのプログラムが形作られアクティビティが見出されていった。

複雑な関係性が求められる立地において、いくつかの顔を持つ建物は珍しくないが、ここで特筆すべきは、設計者が意図した 4 つの顔が、正方形平面の各辺ではなく、それぞれ開放的な表情を持った 4 つの角に割り当てられているという点である。1 つを除いて 4 つの角は吹抜けとなっている。吹抜けは、2 階スラブ小口と手すりによって描かれる、外部へ続く大らかな L 型の曲面によって縁どられているため、適度に囲われた感覚もある一方で、他の場所とのつながりも慎重に維持されている。

書架やカウンターなどが、家具以上／建築未満のミドルスケールエレメント（MSE）と呼ばれ、アクティビティを生むために、主要なツールとして用いられているが、これは、一般の可動家具は場所をつくるには小さすぎるし、一般の建築エレメントはアクティビティを醸成するには大きすぎるという考えによるものと思われる。上述の吹抜け回りの曲面手すりには、それに沿ってカウンターが設けられているだけでなく、スラブ小口と接する天井は仕上げがなかったり途中で終わっていたりすることから、この L 型の曲面も建築から少し独立した、大きめの MSE であるように感じられた。

200 mm を基準にした柱は、このような空間のなかで主張しすぎず経済的である。一方で、これらも MSE のひとつのように思えてくるのは、柱が上記スラブ小口と同寸であるだけでなく、場所を分けたりつなげたりする起点として配置が十分に吟味されているからであろう。

設計者がメーカーと共同開発した折戸サッシは、プロジェクトルーム／通路間や、各吹抜け／外部間などに用いられているが、大きさはミドルスケールでありながら、操作が極めてスムーズであることから、使い方や気候、もしかすると気分によって、繊細にアクティビティをサポートするものであることが理解できた。

ミドルスケールが生み出す多様なアクティビティの連続の中で、周囲との関係性の中で 4 つの特異なフォーカスが立ち現われ、使い手の記憶に刻まれてゆく。「顔」とはファサードというより場所のことであり、あるいはそれらが混然となった情景のことであった。

敷地の複雑な関係性とプログラムを解きほぐし、学生や職員の過ごす魅力的な情景として再構成した手腕は見事というほかない。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。



公園に面した東側外観。



建築主：	シマダアセットパートナーズ株式会社
表彰建築士事務所：	株式会社シーラカンサンドアソシエイツ一級建築士事務所
施工：	中川企画建設株式会社
所在地：	東京都港区六本木7-17-36
主要用途：	事務所
構造：	RC造（壁式）
階数：	地上3階
敷地面積：	270.77㎡
建築面積：	162.27㎡
延床面積：	431.78㎡
竣工：	2020年8月
撮影：	中村 絵

設計趣旨：

敷地は六本木の中心地、細長い路地の奥に建ち、東側は公園に面する。住空間に近い快適性をもつ12のテナントオフィスが求められた。公園側はビルが立ち並ぶ大きな風景、反対側は建物が隣接する下町のような小さな風景。都心に空いたvoid（公園）の開放感を取り入れながらふたつの風景を接続し、視線、風や光が通り抜けるテラスのような建築を目指した。

敷地と公園の高低差により地上レベルは日照や風通しは期待できない。ふたつの風景を接続し空間が断面的広がりを持つよう、スラブを傾け積層させた。そこへ開放的な建具を組み合わせ、天井面を滑るように光や風が通り抜けていく。斜めスラブの構成は住宅側の建物高さを抑え公園側からの視線を遮る。室内は逆梁スキップフロアのワンルームで、水廻りやシャフトをコンパクトにまとめた。

ワークスタイルとライフスタイルが曖昧に重なり合う新しい都市居住のあり方に応答し、自由なアクティビティが街の風景を彩ることを期待したい。

(赤松 佳珠子、大村 真也)



赤松 佳珠子（あかまつ・かずこ）
CATパートナー、法政大学教授
1968年 東京都出身／1990年 日本女子大学家政学部住居学科卒業／
1990年 シーラカンス（のちC+A, CAT）に加わる／2002年 CATパート
ナー／2013年 法政大学デザイン工学部建築学科准教授／2016年 法政
大学デザイン工学部建築学科教授／2023年 神戸芸術工科大学客員教授
／現在、CATパートナー、法政大学教授、神戸芸術工科大学客員教授
（撮影：ToLoLo studio）



大村 真也（おおむら・しんや）
CATパートナー
1981年 宮城県出身／2006年 法政大学大学院建設工学科修士課程修了
／2007年 CATに加わる／2019年 シニアアソシエイト、ディレクター
を経てCATパートナー（撮影：ToLoLo studio）

選考評：

敷地は、六本木といいながらも、ギリギリまで小規模な建物が密集する下町のような地域にあり、計画地はさらにその中の旗竿状敷地の奥に位置する。幸いにも、1段高いレベルではあるが、東側に開かれた公園があり、設計者はこの敷地の持つすくやかなポテンシャルを最大限に引き出し、住宅スケールの12室からなる快適なワンルームテナントオフィスを実現している。

建物は、公園側に向かって逆梁のスラブを斜めに持ち上げた特徴的な断面計画からなり、公園からの視線を見事にコントロールしつつ、光や風を室内に取り入れている。一般的に、「開かれている」といいながらもカーテンやブラインドで閉じて使われることが多いが、この建物では、審査時も、ほとんどのオフィスが設計者がイメージしていたであろう公園に対する開放的な使い方をしていることが印象的であった。

また、この建築で特筆すべきは、優れた空間構成だけでなく、裏方になりやすい共用部や外廊下に対しても建築的な可能性を探りながら高い品質の建物を実現している点であり、このような小規模な施設に対しても、真摯に向かい合う設計者のプロフェッショナリズムが随所に感じられることである。高く評価したい作品である。

(宮崎 浩)



宮崎 浩（みやざき・ひろし）
建築家、プランツアソシエイツ主宰
1952年 福岡県生まれ／1975年 早稲田大学理工学部建築学科卒業／
1977年 早稲田大学大学院理工学研究科修士課程修了／1977～89年 株
式会社横総合計画事務所／1989年 株式会社プランツアソシエイツ設立